

ブロント語を喋る初音ミクが未来を変えるとか言ってきた

タクティス・ハルバード=レミィ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みんなに簡潔に伝えるとね、あのね、僕のおうちにきー！

『——次元を引き裂くネギを握った、謙虚な女の子が来たの！』

※プロント語を知らなくても初音ミクとドラえもんを知ってましたら楽しめます

目次

第0話	この言語しか分かんねえよ!!>>プロローグ	1
第1話	強いミク	4
第2話	違和感	7
第3話	いくえ不明	10
第4話	汚いさすがのび太くんきたない	13

第0話 この言語しか分かんねえよ!!>>プロローグ

これは夢だろうか？ 僕の名前は野比のび太。

机でうたた寝してたら、引き出しが開いて僕の身体は宙を舞い、壁に激突。

んで、目の前に女の子が居る人間らしい。

モデル体型というやつらしく僕より身長が高い。

青に『見える』髪、地面につきそうなクソでかいツインテール。

袖なしの白シャツに青ネクタイという非現実的な格好は僕に夢を与えたの？

黒に青い線が入ったスカートから覗く足は、しずかちゃんより上だよ！

『マスター、未来を変える為に来たけど……』

「へ？」

「ブロント語とオンドウル語と淫夢語、どれがいい？」

首をかしげて聞いてくる。未来を変えるってなんだ？

「まあ座ってよ、淫夢語はなんなの？」

「君の未来はゴミ、はつきりわかんだね」

座って女の子座りすると、僕の未来をさりげなく貶す。

「オンドウル語は？」

「ギミノミライヲガエルダメニキタンレス！」

おいおい、まともなの無いじゃん！

「ブロント語は？」

「ほう、私を座らせるとは経験が生きたね、ジュースをおごってくれる？」

なんで褒めたからジュース奢れってなるの？

つか、これ一択しかないだろ！ なんなのこの人（に見えない）は！

『ブロント語で!』

「よろしくね、ところでなんだけど悲惨な結果があるわ」

そう言うと、彼女は語り始めた。

「名前何?」

「初音ミクだけど?」

「そう、続けて、僕の名前は」

「もう知ってるから」

なんか……緊張するなあ。

「マスターの未来は鉛のサビ並にゴミになってる」

「ひどい!」

「結婚をしても、すぐに離婚ってシヤレにならんでしょこれは?」

「誰と結婚したの?」

ミクは、俯き『ジャイ子』と言った。

は? 嘘でしょ?

僕は自然と背骨が曲がる。

「うわああ……」

「お前に未来はにいい。と言ったらそれまでだけど、その為に私は来たっていか連れてかれた」

「何か凄いの? 君って」

「ふっふー聞いて驚くなかれ! ジャジャーン」

ミクは立ち上がると、何も無い空間に手を入れる。

『ネギットン・ソード』

何かを詠唱したと思ったら、手を引き抜く!

彼女の右手には……見た事のある野菜が握られていた。緑と白の。

ネギやん、ネギですやん……ネギ……ネギですやん。

ネギを大事に抱えて、同じ座り方をする。

普通のネギやないか……ネギやん……ゲームオーバー。

「そのネギ何かある?」

「食べれるし、この尖った部分で更にダメージは加速」

ほっほう？ で？

「しかもA+の嗜好品だから、風味は絶大。最高率のダメージとそこそこの薬味になるのは明白に明瞭」

あれえ、おかしいな。全然高いネギにしか見えない。

「つまり、約立たずってこと？」

「は？ 何言ってるの？ この武器はその辺のヌコ型ロボットと違って次元を切り裂いて過去に行けるのに弱いわけがない」

なんていう壊れ武器なんだ……。

僕はメガネをクイツとして、見据える。

「人間にそんなことは出来ないでしょ？」

「残念、人間じゃなくて」

自慢げに胸を張ると、ミクは横目でチラツと見てくる。

『——歌って踊れる謙虚なボーカロイド。自慢じゃないけどこのネギでキングベヒんもスを倒した事があるわ』と僕に言い放った。

第1話 強いミク

初音ミクは僕の手を握ると、引っ張って立ち上がらせる。

『というわけで、外出する!』

「まって、ジャイアンが玄関に……」

僕も本来なら外に出てる。

出てないのはジャイアンというデカブツが、玄関で待機してるから。

「ネギでカカツつと仕留めるから」

信じて部屋を抜け、階段を降りる。

『あら、のびちゃ……こんにちは』

しまった、お母さんだ!

「どうも」

無愛想にミクは返事をする。

「のびちゃん頑張つてね!」

僕が靴を履いていると、ミクは履かずにドアに手をかけた。

「ミクは靴、履かないの?」

「靴無いの……」

そっか、そりゃ引き出しから出てきたもん、玄関に靴あるわけないよね。

「じゃあ、これ使いなよ」

僕はお母さんの水色のサンダルを、ミクの足元に置く。

「無くてもボーカロイドは痛くないです」

「ごめん、僕が社会的に死ぬから履いてください」

無理やり、ミクの右足首を掴むとサンダルに踏み入れさせる。

片足も。

「サイズはギリギリだけど、許してね」

「ジュースをおごつてあげる」

「どういたしまして」

僕より身長が上なミクに、好意を抱きながら、ドアを開けた。

『のび太遅いじゃねえか!』

『待ってたのに!』

足踏みしたくなるよ。

ジャイアンがバットで自身の手を軽く叩きながら、ニヤニヤ笑みを浮かべてる。

スネ夫は……敵じゃない。

右側の太ったデブでオレンジ色のシャツがチャームなジャイアン。

左側で縮んでる、お高い服で前髪が横に伸びまくってるのがスネ夫と言ったところ。

僕は無意識に、ミクの背中に隠れる。

「誰? この俺様に喧嘩売ってるのか?」

全然ミクの表情が変わらない。そう思ったら呟いた。

「汚いなさすがジャイアンきたない」

「なんて言った?」

「あまりにも卑怯すぎる」

「そんなこと言ってるのかよゴラア!!」

ヤバイ、ジャイアンが本気でバッターボックスに立つように構えた。

一本足打法で、全力のフルスイングで、ミクの頭部めがけて繰り出す!

当たったら……死ぬ。

「本当に強いやつは口で説明したりしない」

ミクはバットを軽く避けると、ジャイアンの頬を右拳で殴る。

「なんだおま……」

「説明するくらいなら私は牙を剥く」

怯んだ隙にジャイアンの腕を掴むと、背負い投げを繰り出す!

衝撃でジャイアンは唸り、身を縮ませてる。

「うお……痛え」

『パンチングマシンで100たたき出すし』

今度はスネ夫をロック！ ミクやばい。

スネ夫は哀れにも逃げ出せないらしく、カチカチ震えてる。

「ゆっ許して……」

「弱者を虐めるからこうなる。みろ、見事なカウンターで返した」

無機質な顔で、スネ夫を掴み、拳を振り上げる。

ゴスツという音が響いた後、スネ夫は頭にたんこぶを作って力なく倒れた。

僕もこうなるのかな。

「さて、路地裏に行くよ?」

「あっはい」

初音ミクを怒らせまいと誓いながら、いつもの場所に向かった。

第2話 違和感

いつもの場所っていうか、みんながいる空き地。路地裏とか誰が言ったんだ。

ミクに僕は付いてくただけだけど、分かるのかな？

『ネギを使うことすら無かった、のび太くんはいつもあんな感じ？』

「うん、君が2人をボコボコにする以外同じ」

自分でも分かっている、弱いつてことは。

簡単に治るわけじゃない。

「言つとくけど、私は機械だから人の感情なんてわからない」

「感情はわかるんじや？ それに僕は友達だと思ってる」

「機械の？」

「普通の」

歩いて数分、空き地に着いた。

特に人は居な……居た。しずかちゃんが。

「どうしたの？ もしかしてあの子のこと好き？」

「感情分かっているんだよね」

ドンピシャに当ててくるミクは凄い。

「私はなんとも思わないから行ってきていいよ」

「それは出来ない」

「ネギ齧るから」

ミクはすつと、手のひらサイズのネギを出す。

「もつと出来ないから」

行きたがらないミクの手を僕は引つ張って、しずかちゃんに声を掛ける。

「しずかちゃんっ！」

『のび太さん……その子誰？』

普通の人より白い肌、ありえないツインテールは、そう思われても

仕方ない。

「初音ミクだよ！ 僕の友達」

「初めまして、マスターの未来を」

「あーそうそう！ 今度勉強教えてくれない？」

初音ミクの声を遮るように、僕は話を切り替える。

マスターとか引かれるに決まってる！

「分かった、ミクさんよろしくね？」

「よろ、しく」

ミクはぎこちなく笑い、しずかちゃんは「またね」と帰っていく。

彼女が笑ったの初めて見た、割と可愛い気がする。

空き地で何しようかな。

「少し話さない？ 君の事色々知りたいんだ」

「話してなくてすみません」

「いいよいいよ、そこで座ろ？」

三つの穴の空いた筒が山のようになっている場所に乗って座る。

上がり方を分からないようで、ミクはアワアワしてる。

「はい、手を握って」

僕は手を差し出し、握らせると持ち上げて腰掛けさせた。

「ありがとうございます」

ミクって笑顔になるのは辛いのか？ 何故か僕の前で表情が変わらない。

「質問なんだけど、どうやって来たの？」

「のび太くんのお子さんに指示で」

「よく拒否しなかったね」

「ヌコ型ロボットも居ましたが、私の方が優秀なのは確定的に明らかです。四次元ポケットっていう、なんでも入る袋になんか負けません」

残念だけど、三つの言語しか喋れないし、ネギしかない君に勝利はないと思う。

「他に何が出る？」

「歌えますー！」

「歌ってみてよ」

深呼吸をすると、滑らかな声を出す。

『ネギ〜ネギ〜ネギ〜ネギ〜ネギ〜ネギ〜』

「ふむ？」

「ネギっネギっネギ〜」

ネギしか言っていない！ なんだこのネギ愛。

「ネギ〜……forever. endroll」

最後の最後に、超綺麗な声でフォーエバーエンドロールって言われ
ても困る。

『よーするに、歌って踊れないボーカロイド』

「ネガネガはやめてください、歌えないけど踊れるボーカロイドです
！」

「脳筋だよね？」

腕で×を作り『ブー』とミクは言った。

第3話　いくえ不明

散々空き地で話した後、僕は家に帰った。

ミクは何故か、まだ居たいと言っていたので『帰って来てよ』と釘を指しておいた。

お母さんには話しておかないといけない。

玄関の靴を脱ぎ捨て、テレビのある居間にお母さんの前へ座る。

『お母さん、話があるんだけど』

「何かしら？　晩御飯は変更しないからね」

言いづらい、初音ミクを家族にして下さいって？

「その、今日家に居た女の子、初音ミクって言うんだけど、一緒に暮らせないかな？」

「別にいいけど、どこのおうちの子？　挨拶しないと」

ダメだ……もうおしまいだ。

「だっ大丈夫、僕がもう言ってるから」

「次は、ちゃんと事前報告しなさいよ？」

僕は頷き、階段を上がって部屋に籠った。

気がついたら、ママじゃなくてお母さんって呼んでる。

凄いな、ミク。

それから漫画を読んで時間を潰していた。

何故か一向に、ミクは帰ってこない。

もしかして、迷子？　あんなに近いのに？

もうちよい待ってみよう。

午後6時だ。

帰ってきてない。

流石に心配なので、空き地に向かう事に。

階段を駆け下り、靴を履いてドアをうるさく開ける。

息を切らして空き地につくと、顔をあげてみる。

『ミク居ねえ……』

僕は呟いた。ため息のつもりなのに。

最初はそんなに思い入れは無いと思っていただけ、認めるしかない。

ミクに依存してる、1人っ子だからかな？

内心落ち込みながら、僕は家に帰った。

小鳥のさえずりが聞こえる、朝だ。

早起きじゃない、不安で寝れなかった。

「ミクちゃんはどうしたの？」と聞かれた時は、「そうだね」としか返せなかった。

今度こそは見つける。もう1回空き地に向かおう。

パジャマを脱ぎ、シャツと短パン、メガネが僕の格好だ。

階段を降り、また靴を履く。

『お母さん行つてきます！』

「5時には帰ってくるのよ？」

分かっている。そう思いながら、ドアを開けた。

でも、これは分からなかった。なんでスネ夫とジャイアンが？

『あの女どこだ！ 今度こそ！』

「僕が知りたいくらい、見かけなかった？」

「見かけてねえから来たんだよ」

見かけてないのか。

「殴らせろ！ 腹が立ってきた」

『やっちやえジャイアン！』

ジャイアンは腕を捲る。

「やめてよ、僕は悪くないじゃないか」

「のび太の癖に生意気だなあ、帰るぞ」

スネ夫は「え？ 帰るの？」と言いながら、ついていく。

なんだか分からないけど、助かったみたいだ。
とにかく、空き地に向かおう。

人を避け、出来杉に無謀な頼み事（宿題）をして空き地に着いた。
やっぱり誰も居ない。

もう帰ってこない？ ここで最終回？

それから学校にも、商店街にも行った。

八百屋やらスーパーのネギコーナーを特に見たけどダメだった。
時間は午後3時を回って、家に帰還。

そんな落ち込んでる僕は、冷蔵庫からネギを1本取り出す。一番太くて長い方。

ミクは太いの持ってたよね？

——最後の望みにかけることにした。

第4話 汚いさすがのび太くんきたない

今、ネギを握りしめて部屋に立ってる。

僕が立ってるんだ。周りから見たら変な人だろう。

ミクなら、ネギで来るはず！ 今まで無かつたけどあのネギ愛はヤバイ！

誰も来ない事を常に確認できるよう、部屋のドア側を向いてネギを振り回す。

『ミクくネギだ！ ネギっていうかネギ！』

そんなことをいいながら振り回す、もちろんまだ来ない。

「えっと、高いヤツ！ A+だよ！」

くるくる回転して高さを誇る。

もちろん100円ちよいの安い方だ。

「美味しいよ!!」

途端に机側から、炸裂音が鳴り響く。

僕は何かに打ち当たり、吹き飛ぶ。

ネギはもう無い。

椅子が転がっていて、これ（椅子）に当たったんだなと気づいた。

『キラキラキラと輝く未来のネギ〜』

そんな聞き覚えのある声が聞こえ、顔を持ち上げる。

ミクが椅子に座ってネギの白い方を齧ってる。

「A+じゃないですね。どちらかというと激マズ」

不機嫌そうにミクはネギを二つに折ると、開きっぱなしの引き出しへ放り込んだ。

「ミク……どこにいたんだ、ついでにサンダル脱いで」

「帰ろうと思ったんですが、息子さんに呼ばれて」

「息子って僕なの？ 名前は？」

「名前は忘れしました」

本当に忘れた？ そんな。

ミクはサンダルを僕に投げつける。

「疲れたので引き出しに籠っているとネギで呼ばれて来てみれば……汚いさすがのび太くんきたない」

「ごめん、僕だって悪気はないんだ」

「何処がですか？お？ 久々に怒りが暴発しそうなので、晩御飯はネギ使ってください」

腕を組み、ミクは怒りの視線を向ける。

「ミクがいえばいいと思うよ」

「仕方ないですね、分かりました」

鼻歌を歌いながら、僕を横切って階段を降りて行った。

僕って何の為に外でたんだ……？

晩御飯はネギで決まった。

ネギの和え物、ネギの味噌汁、ネギのソテー、ネギご飯。

台所で、僕とミクは並んで座り、お母さんとお父さんと向かい合う形だ。

1番変わった所、家族が1人増えて食卓が騒がしくなった。

『のび太、本当にその子大丈夫なのか？』

不思議そうにお父さんはネギのソテーを摘み、言った。

「うん！ 大丈夫だよ」

「頼むぞ、ミク」

お父さんは、僕じゃなく初音ミクを見て言う。

「そんなあ！」

「分かりました、お父さん」

「否定してよミクも！」

笑いながら、ご飯食べた気がする。

久々にガヤガヤだった。

でも、大きな問題が発生していたのは言うまでもない。

『どうやって寝るの!?!』

天井からぶら下がっている電気を『立ったまま』消してから気づいた。

ミクは僕の布団で目を瞑り『消してくれてありがとうございます』と、丁寧にお礼まで言ってくれました。

「どうやって寝よう」

「私の中来ますか？」

「遠慮」

どうしよう。押入れ空だったっけ……。

押入れをガバツと開け、中を確認する。

お布団が一つあり、それだけだ。

この押入れのサイズは、僕くらい。

ミクだと、膝を曲げないと行けないな。

チラツと僕は、ミクの寝顔を見て決めた。

布団を押入れ内で広げる。

枕を置いて、布団を掛けて。

「ミク、おやすみ」

『……おやすみなさい、マスター』のび太くん

僕は押入れに入り、布団に体を預けた。

本当に真つ暗だね、押入れは。

寝れるのかな？

——目を瞑った、僕は。